

大僧正本多日生師著

# 法華經自我偈講義

定價金貳拾錢  
送料一部金貳錢

(統一誌編輯部の依頼のもの送料一部  
金五厘、但し申込の郵指定を乞ふ)

日蓮教學に重大なる病患あり、本尊の不鮮明と信仰の不純となり、或は萬有神教に等しく、或は庶物崇拜に墮り、或は姦祠迷信と異なるなし、法華に依經して眞言宗のふんごしかつげる者、日蓮の門弟子にして天台の精粕なむる者、滔々弊風をなして遂に怪むなし矣、此の痼種を除去せざんば永く宗風宣揚の機會を逸せん也。本佛釋尊の久遠實成と十方應現とを闡顯して本尊の統歸を示し、一心欲見佛の至信を勸め、良醫良藥の慈訓を垂れて、純正なる信仰を説くもの法華經壽量品なり、經文の明鏡を規準として日蓮上人の遺文を拜せんに、釋然として會通する事を得ん。

日蓮上人以後六百幾十年、本多日生師によりて初めて本佛釋尊の御徳は遺憾なく光顯せられたり、本尊に關し、信仰に關し、一切の疑悔は氷釋せられたり、日蓮上人と日生師、日生師が明治大正の代に日蓮主義宣揚の功勳は古今稀なるも、特に日蓮教學の上に加へたる犀利なる明解は、眞に道を求むる者の爲に日月の巨燿に齊しからんか。

本書は本多日生師によりて法華經自我偈全文を講義せられたるもの、必ず一本を購ふて精讀せざるべからず、敢て大方に薦むるものなり。

大正十三年春立教開宗之日

統一編輯局同人

### 特價引割

施本宣傳用に利用せらるゝ人の爲に、一は普く多數の購讀に使せんが爲め、一は統一誌宣傳の廣  
告費投資の意味に於て、特價拾部金壹圓(送料共)にて御雷めに應じます。

發行所

統一編輯局

名古屋市東區田代町城山

電話長東五四八七番  
振替名古屋一〇八一九番

表紙裏に簡單なる施本の總旨(例者、爲  
何某家先祖代々菩提、施王何之誰)印刷  
御希望の方には五百部迄毎に金壹圓の割  
で御雷めに應じます。

## 目次

此際に於る吾人の覺悟……………	佐藤鐵太郎
日蓮主義より見たる無量義經……………	井村日成
罷睡錄……………	山根日東
我等以何に進べきか……………	森川日修
記事報導……………	

第廿八年八月號

# 統一

# 一



大僧正本多日生師著

# 法華經自我偈講義

定價金貳拾錢 送料一部金貳錢

(統一誌編輯の体裁のもの送料一部金五厘、但し申込の郵指定を乞ふ)

日蓮教學に重大なる病患あり、本尊の不鮮明と信仰の不純となり、或は萬有神教に等しく、或は庶物崇拜に墮り、或は娑羅迷信と異なるし、法華に依經して真言宗のふんどしかつげる者、日蓮の門弟子にして天台の精粕なむる者、滔々弊風をなして遂に怪むなし矣、此の癥種を除去せずんば永く宗風宣揚の機會を逸せん也。本佛釋尊の久遠實成と十方應現とを闡顯して本尊の統歸を示し、一心欲見佛の至信を勧め、良醫良藥の慈訓を垂れて、純正なる信仰を説くもの法華經壽量品なり、經文の明鏡を規準として日蓮上人の遺文を拜せんに、釋然として會通する事を得ん。

日蓮上人以後六百幾十年、本多日生師によりて初めて本佛釋尊の御徳は遺憾なく光顯せられたり、本尊に關し、信行に關し、一切の疑悔は氷釋せられたり、日蓮上人と日生師、日生師が明治大正の代に日蓮主義宣揚の功勳は古今稀なるも、特に日蓮教學の上に加へたる犀利なる明解は、眞に道を求むる者の爲に日月の巨燿に齊しからんか。

本書は本多日生師によりて法華經自我偈全文を講義せられたるもの、必ず一本を購ふて精讀せざるべからず、敢て大方に薦むるものなり。

大正十三年春立教開宗之日

統一編輯局同人

## 特價割引

施本宣傳用に利用せらるゝ人の爲に、一は普く多數の購讀に便せんが爲め、一は統一誌宣傳の廣告費投資の意味に於て、特價拾部金壹圓(送料共)にて御需めに應じます。

名古屋市東區田代町城山

發行所

統一編輯局

電話長東五四八七番  
振替名古屋一〇八一九番

表紙裏に簡單なる施本の趣旨(例者、爲何某家先祖代々菩提、施主何之難)印刷御希望の方には五百部迄毎に金壹圓の割で御需めに應じます。

## 此の際に於る吾人の覺悟

佐藤鐵太郎

私の今日申上げます事は「此の際に於る吾人の覺悟」と題して置きましたが、これは申上げる迄もないやうな演題でありまして、既に佐藤阜藏中將及び井上博士から色々懇切なお話があつたといふ事を承つて居りますので、私の申上げる事は或は蛇足を加へるに過ぎぬだらうと考へます。けれども自分を感じて居ります事はやはり自分が申上げるのが一番よろしいのでありまして、忌憚なくかね／＼考へて居る事を申上げて見たいと思ひます。

私この頃排日問題といふやうな事に就きまして、耳うるさい程色々の事を聞いて居りますが、その事よりも更に自分の頭に感じて居りますことがあるのでございます。それはどういふ事かと申しますと、昨年震災後に頂戴致しました詔のことでございます。あの詔は如何なる事を仰せ出されたかといふことは皆様も御承知でありますので、その講釋を何も致す譯ではございませぬ。たゞ私はあの詔を頂戴するに至りました吾々同胞の爲に泣くのであります。或る先覺の話を聴きますと、日本國が肇まりまして、即ち神武天皇様より今日に至る迄の間に、國民に對しまして 陛下よりお諭しを蒙つたことが二百數十回あるやうでございます。私これは餘りに多いと思ひましてこの頃昔からの詔勅集を調べて見ますといふと、私には百八十何回しか見當りませぬが、先覺の言ふ事でございますから二百六十回位 あつたものと見えまするが、その 陛下のお諭しといふものは、道學先生が吾々に道徳とは如何なるものであるといふやう

な事を説くのは違ひまして、その時々に方りまして國民が是非服膺しなければならぬ事を仰せ出されたのであります。然るに未だ曾て一度も同じ御趣意の御詔勅を二度下されたことはないのであります。所が昨年吾々國民に下さいました詔書の中には、既に「先帝の聖訓に恪遵して」と仰せられました通りに、あの詔書と同じ意味合のことを、明治天皇様から教育勅語と致しまして、又戊申詔書と致しまして、二回下されたのであります。それと内容に於てあまり違ひの無い所の詔書を、今上様から又下されたのでございます。子供が親に叱られても、二度同じ事を叱られるといふことは子供の耻辱ではありませんか。然るに更に「ズツと重い意味合の詔書を、吾々國民が生きて居る間に二回も頂戴するといふことは、何といふ耐甲斐ないことでございますか。私は國民としてこれより以上の耻はないと思ひます。

明治二十三年に下さいました教育に關するお勅語は、どういふ時に下さいましたか。あれは日本に議會が開けまする開院式の年の僅に一ヶ月ほど前に頂戴した所の勅語であります。あの教育勅語の大御心は、どういふ所に在るかといふ事を申し上げます、異なる事でございますが、先帝様の遊ばしました所の御製がござります。

神つ代の御代のおきてをたがへじとおもふぞ己がねがひなりけり。

と仰せられた、申上げる迄もなくあの教育に關するお勅語は、天照大神様から今日まで傳はつた所の教をよく守つて、日本の國體に基く所の大精神を本とする、この道徳に立つて、これは中外に施しても間違ひのない、古今に通じてもかはらない所の大道である、これを自分も守るからお前等國民もみな守れと仰せられたのであります。憲法の御發布に依りまして日本國は法治國となりました、法治國となりましてもそ

の精神といふものは日本國の國體に基く所のこの大道徳から解釋しなければならぬのであります。所があるの後、日本の憲法の實際の應用の有様を見ますと、果して如何でございますか、強ち政黨の事を言ふではありませぬが、政治界が大體腐敗極まつて居ります。我が日本國の國民道徳を忘れたる所の舉動が、政黨者に依つても國民に依つてもごんごん出て來ましてあの教育勅語の意味といふものは毎日々々裏切られて居るのであります。

それから又戊申詔書は、どういふ時に下さいましたか、戊申詔書の下されたのは明治四十一年であります。彼の明治二十七八年の戦役は結構な事に終りましたが、遺憾ながらあの時に三國干渉が出ましたが爲に、日本國民は所謂風新嘗膽十年を積んだのであります。その結果と致しましては日本國民は非常な意氣込であつた、軍備も非常に擴張されました、我が海軍の如きは數ふるにも足らぬやうな位置から、世界の第四の強い力を備へるやうになりました、陸軍も亦これに伴うて充實致しましたが、それよりも尙ほ記憶すべき事は、外國との取引の關係が三倍半にも殖えまして、日本の富も數倍になつたのであります。その結果と致しまして日露戦争があつた通り立派な事になつたのであります。軍人も相當に働きました、無論御皇室の御稜威に依る事とは申しながら、國民の十年間の風新嘗膽が報わられたのであります。所が日本國民は頼みにならぬ國民である、あの戦捷に上調子になりまして、驚くべき奢侈の風があつた頃から起りました、さうして思想といひ風俗といひ誠に面白からぬ事になりました。そこで、明治天皇様がこらえ切れずして四十一年にあの戊申詔書を下さつたのであらうと存じます。華を去り實に就き荒怠相、謙め自強息まざるべし——華やかなやうな事を去つて健實なる生活に入れ、荒んだり惰けたりするやうな心持ではないかぬ、

自ら大いに強めて暫しもやむなといふ、自強不息の大教訓を下さつたのでありますが、これも——吾々が日夜お慕ひ申上げて居る 明治天皇様からの仰せですらも、殆ど何等の効が無かつたのであります。

ちよつと思ひ起して見ますといふと、明治天皇様は三十七年、即ち日露戦争で國民は又勝つた、又勝つたといつて有頂天になつて、號外々々で大騒ぎをやつて居る際に、あの際にモウ斯ういふ事をお考へ遊ばして居らつしやる。あの時の御製を拜すると實に涙がこぼれる御製が多うございます。

ひらくればひらくるまゝに思ふかなあらぬ道にや人の入らんと。

三十七年戦争の真最中、日本國が今申した通り號外々々で狂氣の如くなつて居る際に、斯ういふ御製がございませぬ。世の開け行くといふことは誠に結構な事であるが、これが爲に悪い事でも出来て來はせぬかと御せられる、誠に大御心のほど恐入る外はありません。さういふやうな御心持であらせられたけれども、今申す通り戦の大勝利といふことに酔ひまして、國民は健實な氣風を失つた、そこで仕方なしに 明治天皇様から「華を去り實に就き荒怠相、誠め自強息まざるべし」といふ御詔勅を下さつたのであります。それでも改まりません爲に 天皇陛下は更に御心配遊ばしまして、四十二年になりまして又斯ういふ御製がございませぬ。三十七年の御製の上の句はよほど大御心に深く御考へ遊ばしてあらせられると見えまして、やはり同じ上の句でありますが、

ひらくればひらくるまゝにいにしへにかはる思もある世なりけり。

と仰せられました、教育勅語に訓へて置いたあの皇祖皇宗以來の我が日本國の大道徳もかはつて來たやうぢや、「かはる思ひもある世なりけり」——世の中には所謂社會主義なるものも芽を吹き出して來た、色

々面白くない事が出来る、風俗も日々に頽廢するやうである、その様子を御詠みになつたのでありませう。それから益々世の具合が面白くなく思召したと見えまして、四十四年に斯ういふ御製がございませぬ。

いそのかみふるきてぶりをのこさなむあらためぬべき事おほくとも。

皇祖皇宗の昔のおきて、昔の心持をのこしたものである、たとひ改むべき事がいくらあつてもこれだけは残したいものだといふ思召が現れて居ります。誠に畏れ多いことでございます。然るに斯程までに御心配の効もなくその後の様子がどうも宜しくない、斯くして四十五年にどうも畏れながら御崩御遊ばされたのであります、この四十五年にも斯ういふ實に悲痛極まる御製がございませぬ、雲といふ御題で國家の事には關係のない様にも見えますが、この御製は國民が忘れてはならぬ御製と思ひます。

ひとむらと思ひし雲のいつのまにあまつみそらをおほひはてけん。

今まではさほどの事でない、雲がちよつと出た位の事に思つて居つたが、いつの間にか天一バイになつてしまつた、この大御心を吾々國民はどう拜察致しませうか。どうどうその年に御崩御遊ばしたのであります。

明治天皇様が吾々國民を如何に思召して居らせられたかといふことは、御製の度毎にこれを拜するのであります。その中に皆様も決して忘れることの出来ない一つの御製がございませぬ。それは

つみあらば我をどがめよ天つ神民は我が身のうみし子なれば。

といふ御製がございませぬ、實は佐藤は大それた考を持つて居りました、平生 明治天皇様がお詠み遊ばす御製はいつでも卒直であらせられる、何事も思ひの儘に御心をあはし遊ばして居らせらるゝ、所がこ

の御製だけでは何となく理窟があるやうにも考へられる、ごうも吾々は天子様の「民は我が身のうみし子なれば」といふ事に水くさく感じた、誠に相濟まぬ事でありませんが、これはやはり「義は君臣にして情は父子の如し」といふやうな意味をお詠みになつたものである位に考へて、何となく平生の御聲とは違ふやうに感じた。所が承りますといふこの御製は、幸徳秋水があの大逆を企てました時、一伍一什を陛下の御耳に達しました際に、陛下がお詠み遊ばした御製ださうであります。彼等に罪があるならば自分を咎めて貰ひたい、彼は元來自分の生んだ子である、親の躰が悪いから子が斯ういふ考になる、悪ければ自分が悪いのだから自分を咎めて貰ひたいといふ御眞情をお詠み遊ばして、幸徳秋水が如き者をも少しもお怒り遊ばし、おうらみ遊ばされた御様子がない。此の事を承りまして、佐藤は大分たまらなくなつて参りましたけれども、併し何となくまだ満足致しません。その内に斯ういふ事を承りました、宮中の事は九重の雲深くして直接承ることは出来ませぬ、佐藤の申す事も或は間違ひかも存じませぬが、私が聞きました儘を申し上げますといふと、皆様も御承知の高輪の姫宮様、常宮様、周宮様と仰せられました、實に御側發にあらせられ、お情の深い方であらせられた。あのお方のお情のお深い事は、吾々が従軍して居ります際に、ある時雨殿下よりお側の者に、「出征する者は新橋の停車場から出ることもあるのか」と仰せられたので、「その事もございます」と申上げた所が、「その汽車の出る時間を知らして呉れ」と仰せられて、その時間になりまして「只今汽車の出る時間でございます」と申上げますと、雨殿下はあの高輪の御殿の御庭にお立ち遊ばして、新橋から出た汽車がズツと品川の方に隠れてしまふまでジツとしてお見送り遊ばした。又その内に「夜は出ないのか」と仰せられますから、「夜分は深更のことでございますから……」と

申上げた所が「深更でも宜いからとにかく知らせよ」といふ御沙汰であつたさうであります。そこで申上げますと、一たび御寝になりました後でもお起き遊ばして、如何なる寒中の寒い時でもあのお庭にお立ち遊ばして、汽車がゴウといふて品川の方へ参つて音の聞えなくなるまで、チャンとお立ち遊ばしましてお見送り下さいましたといふことであります。これは當時誰も知らぬ事でございます、その御心持はよく分つて居ります、彼等が國家の爲に戰場に行つて呉れるといふことは辱けない、願はば丈夫で立派に功名を立て、歸つて呉れるやうにといふ思召に相違ありません。さういふ事を若しあの際に聞きましたならば、吾々従軍者は泣かずに居られなかつたのであらう。それと同時に如何に勇氣を起しましたか、残念ながらその事を後で伺つたのであります。まだ小さい時から斯ういふお情けの深い方で、非常に御側發であらせられました、この宮様が或る時斯う仰せられた「時々参内してお父様に御對面申上げるが、未だ一遍もおやさしいお言葉を頂戴致したことがない、淋しい」と仰せられた。御尤ものことであります、誰でもサウであります、自分の父親から一遍でもやさしい言葉をかけて貰つた事のないといふことは、如何にも淋しいことであります。御側發であらせられるだけ殊にそのお感じが深かつたのでせう、御無理もないことでございます。御側發の佐々木候爵がその事を承りまして、これは一大事である、御親子様の御間に斯ういふお考があまり遊ばすやうな事では困つたものである、畏れながら陛下はあまりお氣強くあらせられる、これはどうしても如何にお叱りを蒙つても御諫言申上げなければならぬ、斯う考へて参内をして明治天皇様に一伍一什を申上げたさうであります。明治天皇様はそれをお聞きになつて暫くの間黙つて居らつしやつた、やがて仰せ出されたのは「親子の情に變りはない、併し自分には數千萬の子供があるか

ら別け隔ては出来ない、これだけは許せ」と仰せられたさうであります、流石の候節も堪らなくなつて思はず落涙をして申上げる言葉もなく退出したさうであります。明治天皇様は吾々風情の者までも、日本の數千萬の國民を、御自分様の第一の姫宮様、第二の姫宮様と別け隔ては出来ないと思せ出されるほどにお考へ遊ばして居らつしやつた。これを聞いて國民は何と思ひますか、世界廣しと雖も天子様が國民の事をこれほど深くお考へ遊ばして居らつしやる國が何處にありますか、日本人は實に幸福であります。明治天皇様は御歴代の天子様の中で殊に御慈悲深くあらせられたといふことも、吾々身に泌みて考へて居る事である。けれども御歴代様もやはり同じ事であらせられたに相違ない、神武天皇様からこの方、吾々はよく知りませんが、知らず識らずの裡に斯ういふお慈悲の心持の下に育てられて来た日本國民であります。私は少しお恨みを申上げたいやうに思ふ、斯程まで思召して戴かなくとも日本國民は満足である、むしろ斯くまで思召して下さるごいふことは少しひどい、斯う申上げたいやうな氣がする。けれども明治天皇様はさういふ御心持で吾々日本國民を御覽遊ばして下さつた、——落涙の外はありません。

そのお方様がこれではならぬと思召されて、これから後憲法を布くにも國體の淵源を忘れてはならぬと仰せられ、又戦争には勝つたが斯ういふ風ではいかぬから、能く實質剛健な氣風に立歸らなければならぬと仰せられた、この二回の御詔勅をあまき身に泌みないでウカ／＼として居る間に、昨年あゝいふ事があつたのである。殊に吾々遺憾に思ひますのは、日本の堂々たる教育者といふやうな方でも、教育勅語に對しましてあれは舊道徳である、今の世の中には合はぬ事である、戊申詔書の如きもあれは消極主義である、國民が發展する時には驕奢もよろしい、立派な物を着るといふ考がなければ立派な物は出来て來ぬのちや

といふやうな意味で、これを誹謗する者すらもあるごいふに至つては、何たる事でありませうか。日本國民は情けに依つて育ちまして、情けを感じて、御恩といふことを殊に深く考へる國民であります。その中から今のやうな大それた考を起して、さうして若い者に教へる者が出来て來たごいふに至りましては、實に残念な話ではありませうか。日本では——これは他の國では聞かぬ事である——母親が赤ん坊を抱いて寝て居ります時でも、赤ん坊が若し小便でも致しますと、その濡れた方に母親が寝まして、今までの温かい所に子供を移して寝せるごいふやうな、さういふ尊い慈悲の考を以て育て、下さつたので、吾々もそれで大きくなつて來たのである。それだから日本國民は昔から感恩の念、感謝の念といふものが非常に深い國民であつて、そこに忠義も孝行も宿るのであります。外國の人にいくら忠義を説いて聞かしても孝行を説いて聞かしても分らぬごいふのは無理もない、何故ならばさういふやうな何千年となく養ひ來つた所の經歷がないからであります。然るにその日本國民がこの頃はごいふ事でございませう、これ等の大切な教すらも忘れてしまひ、再び又同じ意味の御詔勅を拜しなければならぬやうになつたごいふ事は、先刻も申上げました通り日本國民の耻ではないですか、若し三たび斯ういふ事を頂戴したならばご致しませうか、私は如何なる事がありましてごこれだけは忘れてならぬと思ひます。

排日問題などに就きまして、日本國民は亞米利加が横暴だ、横暴だと叫んで居ります、如何にも横暴である、のみならずこれは餘程前から計畫した事である、吾々軍人の眼には能く映じて居りました。日本の國民は大抵亞米利加は正義人道の國であるごいふやうな事を信じて居りましたが、吾々の眼にはモウ明かに映じて居つたのである。今度あゝいふ排日問題が起きました、これなども私は申します、成程亞米利

加は横暴である、日本國民は大侮辱を受けました、けれども侮辱されるといふのはごつちが悪いかと言ひましたならば、侮辱される者の諸甲斐なきが一番悪いのでございませう。誰が凍らした者に對して侮辱を加へませうか、今度の排日問題の如きは、歴史あつてからこの方ない國民の耻辱であります。歴史の上から想ひ起しますといふと、日蓮聖人が立正安國論を唱へられましたあの時代に、元の國から使の持つて参りました謂はゞ國書にどんな事を書いてあるか、亂暴狼藉極まる事を書いて居るかと思ふと左程でもありませぬ、併ながら當時の鎌倉武士は憤然として怒つたのであります。その元の忽必烈から日本によこしました國書の一節を讀んで見ますと、

聖人四海を以て家と爲す、相通好せざるは豈一家の理ならんや、兵を用ふるに至つては夫れ孰か好む所ならん、王それ之れを聞れ。

とあります。つまり聖人は四海天下を以て自分の家として居るのである、家の内に居る者がお互に仲好くして誼を通せぬといふことは、一家としての道理に叶つて居らぬ、喧嘩をし合ふが如き事は面白いことではない、喧嘩はせんで済むやうにお前もしなさいといふので、婉曲に自分の言ふ事を肯かなければ兵力を擧げてお前の國を伐つぞといふ意味は加はつて居りますけれども、言葉の上には左程亂暴狼藉な言葉はありません。今度の事の如きはこれと趣を異にして居る、日本國を侮辱したのみならず日本民族を侮辱して居る、この時は唯王者が王者に對する言葉だけで深い意味はありませんが、今度のはモツと深刻であります。それから先刻申上げました日清戦争の後で三國干渉がありました時に、日本に露西亞からよこしました所の覺書にも斯ういふ一節があります、これなども決して亂暴狼藉などは言うて居りませぬ。

遼東半島を日本に所有することは常に北京(北京の支那政府のこと)を危うするのみならず、これと同時に朝鮮國の獨立を有名無實とするものにして、右は將來極東永遠の平和に對し障礙を與ふるものと認む、仍て露國は日本皇帝陛下の政府に向つて重ねてその誠實なる友誼を表せんが爲に、茲に日本政府に勸告するに遼東半島を確然領有することを放棄すべきを以てす。

平つたく言へば遼東半島を日本で有つて居るといふことは、北京政府も危いのみならず朝鮮の獨立といふことも有名無實になる、さうすると東洋の平和を維持することは出来なくなるから、自分は友情もだし難く、誠實なる友情を以てお前の國に遼東半島を還付するやうに勸告する。外交の辭令もよほど巧みになつて居る譯であります、この中に大した日本を侮蔑したやうな言葉はありません、併ながら日本國民は非常に憤慨致しました、心外な事と考へました。明治天皇様は、東洋の平和を維持したいが爲に支那と戦つたのである、平和を維持するといふ事の爲に遼東を還付することは別に惜みも何も致さない、東洋の平和を維持する爲には彼の勸告に従ふべきである、國民はこの大勢に鑑みて間違はぬやうにしるといふ、悲痛極まる所の御詔書を國民は頂戴致しました。そこで國民が、これではならぬ、誠に残念な事だと思へまして、どうしても國力を養はなければいかぬ、力が無くてはいかぬといふことに着眼したのであります、それで臥薪嘗膽十年にもなつたのであります、比較的穩かな言葉で日本に申して参りました、佛蘭西が申したのも、獨逸が申したのも同じ事でありませぬ。今日日本國民が亞米利加からあゝいふ侮蔑の態度に出る事を目前に見まして、眠つて居るのではありませんか、眠つて居るからして、志ある者は残念になりまして、むやみに動き出しました。これが果して善いか悪いかといふ事は私などには非常に心配であり

ます、日本人があまりに此の事に注意致しませぬから、嘆び起さう／＼と思つて警鐘をガン／＼打つのであります、これでもか／＼といつてガン／＼打ちましても日本國民が臥薪嘗膽十年のやうな心持になりませんから、有志の血に燃えて居る人は如何なる事をやり出さぬとも限りませぬ、さうなりましたら日本國に何の準備も無くとも、仕方なしお相手申さなければならぬやうな事になる。國民はこの際によほど考へなければならぬと思ひます。唯ワイ／＼言ふのは何も恐ろしくありません、犬でもさうです、吾々を犬に譬へては悪いかも知れませんが、犬でもむやみにワン／＼吠えて来る奴はそんなに怖くありません、摺り足でウーツと云つてやつて来るのが怖い。日本國民の態度はあのウーツといふやうな心持でなくてはならぬ、輕はづみにワー／＼言つて、横暴なる彼を膺懲せざるべからずナンと言つて激しく言ふが如きは、大國民の態度としては成つて居りませぬ。大國民といふものは慎重なる態度を以て、齒を喰ひしげつて、頭を敲るなら殿れ、その内にはお相手申すぞ……さういふ心持で居らなければならぬものと私は信じます。此の頃の所謂愛國の志士なる者の處置は如何にも輕はづみである、私はこれに與する者ではありませぬ。日本國は先刻申上げました通り今までこんな侮蔑を被むつたことはない。彼のベルリが参りました時代——日本では彼のベルリは日本の戸を敲いて眼を覺まして呉れた恩人であるといふので、久里濱などに石礮まで建て、日本人はお辭儀して居りますが、あの時の實際の有様、實際の向ふの記事をよく讀んで御覽なさい、そんなものではない。若し日本が肯かなかつたならば琉球と小笠原島ぐるむ奪つてしまはう——これはハツキリさういふ事が書いてあります、のみならず小笠原、琉球にはすでに石炭を貯へる所までも要求して、琉球人のいやがるのも構はずそれを設置して居る、小笠原島は實際に占領して居ります。さう

して日本に向つてはさういふ事を言つたかといふと、大分ひどい事を実際言つて居る、むしろ言葉の上は今日よりは露骨かも知れない、亞米利加人は元來露骨な國民である、あの時ベルリが言つて参つた言葉は斯ういふのです。

先年來各國より通商の願有之候處、國法を以て違背に及ぶ、固より天理に反く次第莫大なり、然れば蘭船より申達し候通り諸方の通商は是非々々希上候、不承知に候はゞ干戈を以て天理に反くの罪を正し候につき、其方も國法を立て防戦致すべし、然候はゞ必勝は我等に有之、其方敵對成兼ね申すべく、若し其節に至り和睦を乞ひたくば此の度送り置き候所の白旗を押立つべし、然らば此方の砲をやめ船を退いて和睦を致すべし。

随分露骨であります、當時の武士の怒つたのも無理はない、今度お前にこの白旗を渡して置くから、逆も敵はないと思つた時には此の白旗を立てろ、さうしたら許してやる——白旗は御承知の通り降参旗であります……これ程露骨である。併し私は考へる、これほど露骨な、さうして意味の徹底した事に依つて西洋と折衝し得る日本の外交官が今一人でもありますか。ベルリは流石に偉人でありませぬ。とにかく斯様な書面であるから當時の日本の武士は怒りましたけれども、これは誰も知らない、日本と亞米利加の間にはよつと行はれた事でありませぬ、白、公衆の間に罵り辱しめられたのは違ふ。然るに今日は日本は世界の五大國三大國の一として、世界に重きを成して居る、この日本に對して白晝列國環視の間に日本國に大なる侮辱を加へたのである。

所が亞米利加といふ國は此處が實に面白いので、彼の日本の開國の際も、英吉利や佛蘭西、露西亞あた



りが前から日本に向つて、國を開かぬといかんぞといふ事を再々言うて居る、威したり懼したりして色々  
の事を言うて居るけれども、日本は肯かなかつた、最後に出て來た所の亞米利加が斯の如き手段を以て眞  
先に日本の戸を開いた、今日まで日本の戸を開いた者は亞米利加といふやうな風に言うて威張つて居る。  
亞米利加のこの流儀といふものは世界大戰の時も同じ事である、他の國に散々戦はして、モウ何處の國も  
ヘト／＼になつたといふ時分に戰に参加して、歐羅巴へ二百萬の兵を送つたといふけれども、戰をした者  
は一向ありはしない、さうして俺が二百萬の兵を送つたとか、亞米利加なかりせば此の平和を克復するこ  
とは出来なかつたらうといふやうな態度を示して居る。仕事は人にやらして置いて、一番終ひに出て來て  
ウンと威張るのが亞米利加の流儀である、露骨であるけれども面白い。日本人はこの事を能く考へて居ら  
ぬといかぬ、彼は斯ういふ國である、既に日本に對しても斯ういふ風であつた、世界大戰の時も斯ういふ  
風であつた、西班牙に對する戰爭の時も斯うであつた、いつでも斯ういふ風であるといふ事を日本人は考  
へて置かなければならぬ。

ベルリが日本にやつて來た時でも、つまり體よく言へば、日本が若し眼が覺めて居らなければ、筆筒の  
一つぐらゐ無断で持つて行かうといふつもりなのである、初から「モウ夜が明けて大變明るくなつて居る  
のに、お前ばかり戸を閉めて居る」と態が悪いぞ、お前も戸を開けて皆と交際したらどうぢや」といふ親  
切から言うて來たのではない、若し眠つて居る儘であつたならば、戸をこちあけて筆筒の一つぐらゐ持つ  
て行かうといふやつである、その筆法はいつでも同じである、亞米利加は正義人道の間屋だなどゝばかり  
思ふと大間違であります。

さういふやうな事に今日日本がなつて居るのでありますが、さて日本の國力はさういふ有様でありませう  
か。富の力に於ては亞米利加は世界を壓倒するやうな力がある、日本などは逆も比べ物にならない。兵力  
の關係では考へるも涙であります。華盛頓會議の結果として、日本はさうしても亞米利加と對抗し得るだ  
けの物質的勢力を維持することが出来なくなつた。妙な事を言ふやうですが、亞米利加は軍備を節減した  
と言ふ、何が節減して居りますか。あの頃の英吉利といふものは非常に優れた海軍力を有つて居りました、  
亞米利加はその次であるけれども日本と大差は無い、その次は日本であつた、この場合に佛蘭西や伊太利  
を軸にしてしまつて、この三國の間であつただけの會議をするといふ事を言ひ起しまして、その形式を取つ  
たのであります。さうして日本といふものを一番劣等の率に置いて、その率より以上には出来ぬ、自分  
の國は英吉利と同様の率にならんければならぬといふのであります。兵力といふものは百萬なるが故に大  
軍といふものではない、百萬は百萬と相對しては何も大軍ではない、二十萬の兵でも十萬に對しては大軍  
であります。軍備といふものは數ではない、お互の勢力の強弱の關係であります。即ち亞米利加はあの  
時に、英、米、日の三國の海軍力の比較に於ては、六、四、三といふやうな勢力しか無かつたものを、英  
吉利の六を五にして、自分の四を五に上げたのである、誰が亞米利加を目して軍備制限に忠實なるものと  
言ふことが出来ますか。亞米利加は彼の華盛頓會議に依つて海軍の擴張をやつたのであります。今は日本  
はさういふ工合である、即ち武力の上に於ても、富力の上に於ても、殘念ながら日本は侮られるだけの事  
しかありません。井上博士は先刻のお話の中に、まさかの時になつたら敗けはせぬぞと言はれましたけれ  
ども、敗けはせぬぞといふのは空威張である、斯ういふ言葉はこちらに本當に敗けないだけの力が充實し

て、是れに發すべき言葉である。併し、これは決して井上博士を攻撃する譯ではありません。意氣に於ては是非とも斯くありたいのであります。

所がこの二つ位ならばまだ宜しい。此處に至つて井上先生と同説になる譯ですが、彼の弘化 嘉永、安政の時代に、外の國から日本が迫られて仕方なしに國を開きましたがあつた時に極端な侮辱を受けて居りませぬ、さうして日本は今日の隆盛な位地に至るまでの素地をあつた時に作つたのであります。決して日本はあの時に白晝衆人の真中で頭を殴られるやうな事にはなりません。何故か外國人の眼には、日本國民は不思議な國民に映つたのであります。日本といふ國には或るものがある、これがなか／＼馬鹿にならぬものだ、あまり非道い事をするといふと此の日本の或るものが暴れ出してどんな事になるかも知れん、それだから日本は尊重すべき國である、あまり没義道に取扱ふべき國ではないといふやうに考へました。所が實際はあの時日本には軍艦一隻あるのではない、今ちようと思ひ出しましたが面白い事がある、亞米利加のベルリが來た時の奉行からの報告に、「風に逆らつて走る船」とある、それで非常に駭いた、萬事がさういふ工合であつた、大砲もろくな大砲はありはしませぬ、小銃といつても二つ番胴、三つ番胴といふやうな、まるで元込も元込もガタ／＼の古い物があつたきりであります。武力に於ては全くお話にならない。併ながらこの時に日本國が大侮辱を受けないで済んだといふのは、日本國民に所謂或るものがあつたのである。それを西洋人は今まで「武士道」と稱して日本人を不思議がつて居つた、何か能くわからぬがさういふものが日本にあるといふので、何となく感力を感じたのでありませう。

所が今日はどうでありますか、何でもかんでも亞米利加の眞似である。亞米利加でセーターといふものが流行るといふと、猫でも杓子でもセーターを着なければ承知しない、何ですか、アンなちやんちやんこの出来損ひみたいなものが……あんな物を着る位なら日本の友藏ちりめんのちやんちやんこでも着た方が餘程いゝにも拘らず、あんな物を争つて着る。又この頃の女さまのさまは何ですか、男さまは手をたたくけれども、この頃若い人で男の耳かくしがありますぞ、化粧する人がありますぞ。さうしてサア今日はダシシングだ、今日はコンサートだといつて浮身をやつすではありませんか、みな亞米利加の眞似ではないですか。さうして此の頃亞米利加から歸つて來た人に聴くと、「日本がどうしてこんなに亞米利加化されたか」と言つてみな驚いて居る。私は茲にあなた方に問を設けます、あなた方のうしろに、何でもかんでも眞似をするチヨコ／＼した奴がくつ附いて來たとするならば、其の者をあなた方は尊敬しますか、出來ないでせう、此奴が少し生意氣な事でも言つたならば、うるさいから頭の一つ位どやす氣になりませんか。亞米利加人は決して聖人ではない、弱い者と見たならば窘めたいのは當り前である、自分の眞似ばかりして、本當の己れの根本を喪つて居る國民に向つて、何の敬意を拂ふ必要がありますか、私が亞米利加人だつたら今日の日本人を侮辱します、この頃のさまは何といふさまですか。斯う言つたら皆さんを叱りつけるやうでありますけれども、私もやはりその一人であるのであります、誠に申譯ない次第であるけれども、今日はあまりに亞米利加にかぶれ過ぎて居る。かぶれるも宜い、明治天皇様の仰しやつた通り「いそのかみふるきてぶりをこのさなむ、あらたむるべき事おほくとも」——日本の昔からの特色を失はぬやうにするならば、いくら外國のものを採つても宜しい、自分の特色を捨て、外國のものを採るに至つては、狂人でなければ意氣地なしである。外國の特色——これが私はまことに氣に喰はぬ、私はいつでも日本の男

は男らしく、女は女らしくあるべしといふ事を申して居りますが、女の男らしいナンぞといふものは、男の女らしいと同じことで褒められたものではない。それと同じく、日本人は日本人らしくあるべし、日本人でありながら日本人らしくない者があつたならば、これは大べらぼうである。佐藤鐵太郎醜なりと雖も、このきたない所を自分の誇りとして居ればこそ佐藤鐵太郎はあるのである、これが若しあの人がいからと言つて眞似をして居つたならば、誰が見ても佐藤鐵太郎とわかりはさせぬ。その特色——自分の特色を重んずる所に本當のその人の人格といふものがある。その特色を忘れた所のヒョコノノの人間が外國から侮辱されたと言つて怒つて見た所が、そんな瘡痍でいくら怒つたつて何になりませぬか。私は始終斯ういふ感じを致して居ります、多くの人が先進國々々と言ふ、學者も亞米利加を先進國だといふ、私は氣に入らぬ。或る學者と、ナニが先進國だと言つて議論をした事がありますが、先進國とは一體何の事ですか。先進國々々と言つて見た所が、空を飛ぶ事ならば蜻蛉の方が確かに人間より先進國である、水を泳ぐことならば魚の方が先進國である、これは觀方に依ることである。私は此の頃水兵が集りました時に言うて聞かせましたら、皆成程といふやうな顔をして居りましたが、皆様ボートレースを御承知でせう、ボートが並んで競争をする、それが兩方とも眞直に斯うなつて居る時には、兩方とも先進國ではない、その時に一方が少し舵を左の方に向けると、自分の方が先に立つたやうに見える、そこで舵取が「ソラ勝つたんだ」と言つて囂ます。その中に又少し舵を右の方に取る、さうすると自分の方が大變後になつた様に見える、「ソラ負けた、大變だ」と言つて一生懸命にやる。丁度さういふ様



なもので、反對の方向に向ふといふと皆他の者は自分より後に見える、そつちの方に頭を突込むと自分が見えるものです。西洋の文明に心酔して、西洋の方に頭を向けて居るから、そこで向ふが先進國に見えるのである。何が先進國であるか、それは電車を動かすとか、そこらの道路を造るとか、さういふやうな事に於ては向ふがえらい、走る爲の汽車などは日本もお蔭を蒙つて居る、私も今日高崎へ行つて、只今しがた歸つて来て皆様にお目にかゝる事が出来るといふのは、これは亞米利加人の御恩である。それは忘れる譯に行かんが、それとても自分の腹の底まで奴隷になつては相済まんぢやありませんか。

あまり長くなりますから私は最後に此の事を申し上げませう。世界大戰がありまして以後、世界の思想が大變に變つて来て、外國の思想が二つに分れた。これは學者もあまり言はぬやうでありますけれども、私のやうな門外漢にはよくわかる、妙なものでして、富士山に登つて見ると富士山はわからぬ、遠く離れて居るとよくわかる、何事でも觀察といふものは没頭しては駄目である。そこで今日の外國の思想は二つになつて居る、その兩方とも一致して居る點はさういふ點かといひますと、吾々の文明は行詰つたといふ事が一つ、これだけは如何なる人でも皆言ひます、如何なる思想家、如何なる學者の言ふ事を聞いて見ても、吾々の文化は行詰つたといふ。そこで説が二つに分れる、一つの方が言ふのは、この通り行詰つたといふのはさういふ譯だらうか、この行詰つた原因を究めてこれを改めて行かなければならぬ、これが一つ。もう一つの方は、この文明は行詰つた、斯の如き文明に未練はない、こんなものは叩きこはしてしまへ、この文明を叩きこはしてそこに吾々の思ふ通りな文明を建てれば宜いぢやないか。斯ういふ二つに分れました、私はこの前に言うた方の思想はよろしいと思ひます、後の方はやけのやん八派ども言ひま

せうか、見て御覽なさい、困るぢやありませんか。例へばこの統一閣を例に引いては不詳かも知れませんが、この統一閣の建物は行詰つた、こんなものは吾々に不適當だ、モウこんなものは一日も置く未練がない、叩きこはしてしまへ、さうして吾々の理想通りの立派なものを建てようぢやないかといつて、たゞきこはして見たらどうなりますか。若しあなた方が此處に住んで居るとしたら、何日の間雨に打たれますか、風に曝されますか、ひどい目に遇ふでせう。露西亞は恰度今その通りである。若しこれをこはさうと思ふならば、この統一閣よりもより優れたものを他に建て、そこに自分が移つて、然る後に要らぬものをこはせば宜い、何千年を経たやうな大木でも、吾々が五六人で行つて斧で叩けば直き倒れます、けれども一尺か二尺の苗木でも新に造らうといつたら大變な事です、破壊といふ事は恐ろしい事です、吾々は建設といふ事に頭を置かなければなりません。所が一二の、自分が氣に入らぬといふやうな事で氣のイラ／＼して居る連中が、破壊主義を唱へて居るといふやうな事はよほど間違つた事でありませう。併しながらこれは世界の各方面に、或る民族の煽てに乗せられて益々盛んになつて居りますが、これは困つた事でありませう。モウ一つの方の、先刻申したこの今日の行詰りといふものは果してどういふ所から出て居るか、その原因を探つて見ようといふ方は、色々研究した結果斯ういふことになつて居る、彼等はまだ眞の結論には達して居らぬのでありますけれども、今日の行詰りの原因だけは分つた、それは今日まであまりに物質的文明に執はれて精神的文明に重きを置かなかつた。精神的文明といふものに依つて吾々はお互に他人と思はずに、兄弟若くは朋友と思つて、そこに温かい情愛で結びつかなければならぬものである、その點を忘れてたから斯ういふ工合に行詰つたのだ。愛といふ事は今まで夫婦の愛を以て愛の最も純なるものとして立て

た、愛至上主義ナンと言ふ、その愛なるものは夫婦の愛である、男女の愛である、それを極めて上等なものゝやうに考へて居つたが、これは求むる所の愛である、本當の愛といふものは求むる所なしといふことにならなければならぬ、その本當の愛といふものは親子の愛である。今までの道徳の根本の愛といふ觀察は、夫婦といふ横の方に觀て居つた、これではいかぬ、親子といふ縦に見なければいかぬ。世の中の道徳の根本もそこ、世の中の習慣の根本もそこ、すべてさういふ風にして温かい世界を送らなければ、この行詰つた文明を教ふことは出来ないといふ事を多くの學者及び思想家が言ひ出して來た。

これは何であるか、吾々天照太神様、神武天皇様から三千年の間養ひ來つた所の文化はそれでありませう。所が此の頃の譯のわからぬ學者共が新しい／＼と言つてまだ能く思想の固まりぬ青年に譯の分らぬ事を説いて、さうして日本のこの大道徳を舊い／＼と號して誇つて居るやうな風がある。焉ぞ知らん、彼等が新しい／＼と言つて居る事は向ふではモウ行詰つて居つて逆もいけぬ、何とがして改めなければならぬと言ふので、日本の方の舊來の道徳と一致せんとして進みつゝある、これに向つて背後から、その精粕を舐めに行くナンといふ事は、よほどおめでたいと言はなければならぬ、それは私は斷言致します、日本の道徳といふものは人間の至情から出た所の親子の愛を本とした道徳である。この道徳を以て世界の人を教へてかゝらなければならぬ所の三千年來の歴史ある大日本帝國が、輕卒にも向ふの捨て／＼した舊道徳を新しい／＼ナンと言つて、最も尊い自分の懐ろに持つて居るものを舊いと言つて捨てるやうな事があつたならば、これは千年経つても萬年経つても浮ぶ瀬のない低能兒であります。私は日本をこの低能兒にしたくない、お互もなりたくないにきまつて居る。それには即ち 明治天皇様からお下しになりました

所の教育に關するお勅語の眞意を忘れぬやうに、戊申詔書の意味合を忘れぬやうに、さうして昨年頂戴致した所の御詔書を又三度賜はるやうな事の無い様にと覺悟するのが、此の際に於る吾々の何よりの覺悟でありませう。さういふ風になりさへすれば亞米利加から侮られる事もない筈であります、本を忘れたから侮られるのである、決して今日吾々は亞米利加人を怒む所はない、今日の亞米利加人はやはり日本開國當年のペルリと同じ事であつて、今のロッヂとかジョンソンとかいふ人の石像でも、何處か——小笠原島が欲しいなら小笠原島にでも宜しい——建てゝやりたいものです。

要するに今日の一番大切な事は、先帝陛下が仰せられました「華を去り實に就く」といふことである。花のお江戸でなくして實の東京でなければならぬ。日本の都市町村の兄さんたる所の此の東京は「東京へ来て見ると家は汚ないやうだけれども健實に出来て居る、東京へ来て見ると賣る物は少し高いかも知れんけれども、如何にも丈夫な物だ、東京に来て學び得た事は健實といふ事である」といふことにならなければならぬ。所が今日はどうでせう、東京はたゞ華やかなやうな事はばかり、悪い事はばかりを自分の弟に教へて居る、これでは困るではないですか。私が或る所でお話をして居る時に——私は歌人でも何でもないけれども一首浮んだ、それを御披露しようと思つて言ひ出した所が中途を忘れてしまつた、上の句だけ覚えて居つたけれども下の句がどうしても出て来ない、とう／＼降参して上の句だけで御免蒙つて、下の句は此の次に御披露致しますと言つて通じた事がありました、その後日蓮門下の柴田一能師に會つてその話をしまして「一つあなた此の下の句を附けんか」と言ひますと、暫く考へて居りましたが下の句を附けました、これは私はよほど良いと思ふ。私は彼の「敷島のやまこ心を人間は朝日ににほふ山櫻花」とい

ふあの歌は、それは或る點は良いでせうけれども私は氣に入らない、山櫻のやうな吹けば飛ぶやうなものが日本國の敷島の道では困る、私はあの歌は嫌ひだ、そこで吾々共の作つた歌といふのはどうかといふと、今の柴田上人は私の上の句を又間違へた、よく間違ふ歌ですが、柴田上人のは斯ういふのです。

にこり江に染まぬ蓮の華にこそやまこ心の實は結ぶなれ。  
 下の句が殊に良い、けれども私は不同意だ、私の上の句はさうではない、にこり江に染まぬナンといふことはいかぬ、僕のは斯うだ。

にこり江にほふ蓮の華にこそやまこ心の實は結ぶなれ。  
 私は歌人ではありませんから、歌としては良くないかも知らんが、自分の氣分だけは確に現れて居ると思ふ。

だん／＼長くなりなりましたけれども、私一つ妙な事を考へて居ります、これも一つの覺悟だと思ひますから申上げて見たい。昨年あの地震や火事がありました後で、日比谷に講演會がありました、あの時私も出席しまして何も言ふ事が無くて困つたがどうしても何か話せといふことで、己むを得ず話しました、それはその時直覺した事でありますが今の花のお江戸で想ひ出しました——願くは花のお江戸を實の東京にして貰ひたい、これが第一である。モウ一つの願は、約十萬の吾々の同胞がああ悲惨な状況の中で歿くなられた、吾々はこれに供養しなければならぬ、花や線香を上げるも宜からうけれどもそんな事は吾々の望む所ではない、それよりも此の十萬の人が生きて居つたならば——と考へて、それだけの事を吾々残つて居る人でやらうぢやないか、それより以上の供養が何處にあるか。それから又此の十萬の人が慘らしく死

んだのであるが、これ等の人をどうか徒死に了らせたくない、それには此の十萬の人が死んだといふ之を機會に、今までの東京の悪い事を直して行かうぢやないか。東京市民の心得違ひを直して行かうぢやないか。さうしたならば十萬の人が死んでも惜むに足らぬ、その爲に東京、否日本がだん／＼善くなつて行くのだ。實はこの考のたまはしたの私に一つの悲劇がある、それ以來始終さういふ考になつて居りますから、この事を皆様にお話したならば、諸君の中には子供を持つて居られる方も多いやうでありますから、何かの御参考になるだらうと思ひます。それは私は自分の娘の爲め回向をしようといふ事を常に考へて居る、それで斯ういふ事を斯ういふ時に持出して申上げる次第であります。

私に六歳になつて死んだ娘があります、本多税下などもお轉り下さいました、お経を讀んで下さいましたけれども、終に死にました。その子がどういふ譯か自分は非常に可愛い、死ぬ子は可愛い、とか言ひますけれども、そんな事ではない、實際可愛い、自分の子をさういふのはをかしいが、多くの人は皆それを可愛がつて呉れました。その一例としましては、いよ／＼病氣が悪くなる時に、お醫者さんが玄關に座つて泣いて居る、「先生何故泣くのですか」と言ひますと、その先生が言ひますのに、「この御子供は何だか可愛くて堪らぬ、自分が醫者としての資格が無い位であるが今日もお宜しくありませぬ、残念で堪りませぬ」と言つて泣いて居る、どういふ譯かさういふ工合に人を引付ける子でありました。いよ／＼歿なります時に私はその額を撫で、やつて居ります、さういふ時に私は有難い事にいつでも日蓮聖人の事を頭の中に感ずる、日蓮聖人ならば斯ういふ時にどういふ風に遊ばすか、私は思はず言ひました。「お前は人に非常に可愛がられた、これから何年生きて居つてもこれより以上に可愛がられることはない、今死ぬのはお

前の爲には一番幸福かも知れぬが、お前は可愛がられたから澤山人様の御恩を頂戴して居る、その御恩をお前が返すことが出来ないで今死ぬのは嘸殘念だらう、併しその御恩は及ばすながら此の父が返してやるから安心しろ、又お前はこれから後生きて居つたならば、女の事であるから碌な事は出来ぬかも知れぬが、必ず何事か御奉公したであらう、それも出来ぬで今死ぬのだ、嘸殘念であらうが、此の父がお前に成り代つて一生懸命に御奉公するから、これを土産にお前は行つて呉れ、モウ何も思ひ残す事は無いぞ、斯う申しました、勿論六つばかりの子供ではあり、昏睡状態で何もわかりませぬけれども、丁度偶合でございませうか、その時に息を引取りました。召使の者などそこに泣き崩れました。弱いやうでありますけれども私の妻もそこに泣き伏しました。その時に私の口を衝いて出た言葉——これは日蓮聖人を思はんければ出て來ぬと思ひます、妻を顧みて斯う言ひました。此の子を不孝の子にすまいネ、若し此の子が死んだ爲にお前の體に障つたり、それから家の内が陰氣にシメ／＼するやうになつたならば、此の子は知らんけれども不孝の子になるではないか、若しこれに反對に此の子供が死んだ事を動機として、これ迄よりも更に睦しく、家の内を陽氣なものにして禍ひを一轉することが出来たならば此の子は孝行な子になるぞ、此の子を徒死させぬのは此處だぞ、斯う私が申した所が、妻も顔を擧げまして「御尤でございませぬ」と言ひましたが、それから家の内が非常に陽氣になりました。私の朋友が悔みに來まして「お前の所へ來たら悔みに來たやうな心持がせぬ」と言はれる位になりました。それから後自分にどれだけ勇氣が出ましたか、非常なものであります。

こゝです、私は東京の十萬の人が死んだ事に就ても、自分の子供といふことほど痛切には無感感じませ

んけれども、この氣工合を一つ持ちたいものだと思ひます。先刻申しました通り 明治天皇様の二回の御詔勅、それから昨年のあの御詔勅、さうして此の度は又これでもか／＼と言つて亞米利加から難題までも吹かけるといふ時に、これをどういふ風に轉換して参りませうか、仇を思にするにはどうしたら宜しうございませうか。亞米利加の今度の處置は仇であります、この仇を思にするにはどうしたら宜しうございませうか、十萬の人が死に、百億の富が無くなつた、これが崇りて日本興すべし、今の時でなくては自分の主張を通すことは出来ぬといふ機會を捉へてやつた事かも知れませぬ。これに頭を下げて居つたならば、遼東も還せ、朝鮮も獨立させると來るでせう。此の今日の禍ひを活かして、この不幸を幸福に轉せしめるといふ事に國民が頭を注ぐと注がんに依つて、今日の排日問題でも何の問題でもみな解決するだらうと思ひます。日蓮聖人の本當の御性格は斯の如き事に依つて證據立てる——と言つてはをかしいけれども、お慕ひ申して居る自分には日蓮聖人の御性格も斯うであつたらうといふ事が考へられるのであります。人を怨むことなかれ、自から省みよ、禍いを轉じて幸いと爲せ、そこに吾々の生命がある。今日から日本は世界の師表とならうではありませんか、これが吾々の使命である、とにかく吾々は斯うやつて笑ひもしますけれども、腹の中は煮えくり返つて居る、實際残念でたまらぬ、殊に海軍の將官として自分は残念で堪らぬ、願くば吾々の腕を振はぬ内にどうか日本を幸福な状態にして上げたい。臥薪嘗膽十年！たゞこれだけであります。——(終)——

廣 告

海軍中將佐藤鐵太郎閣下講演

此際に於る吾人の覺悟

亞米利加が白晝公然、列國環視の下に、日本國及び日本人を侮辱した、以前より計畫して大侮辱を加へた、時、海軍中將佐藤鐵太郎閣下の衷心よりの聲は、現代の日本人中の何人よりも一番に聴きたい、尊い尊い、叫びではなからうか。閣下は云ふ、「侮辱されるといふのは、侮辱される者の胸甲斐なきが悪いのである」。「亞米利加は華盛頓會議に依つて海軍の擴張をやつたのである」。日本は武力の上に於ても、富力の上に於ても、殘念ながら侮られねばならない、而も日本人の氣魄はどうか。閣下は憤慨して云ふ、「何でもかんでも亞米利加の真似である。……若い人で男の耳かくしがある、化粧する人がある、……亞米利加人は決して聖人でない、自分の真似ばかりして、本當の己れの根本を喪ふて居る國民に向つて、何の敬意を拂ふ必要があるか、私が亞米利加人だつたら今日の日本人を侮辱します」と。而して最後に閣下は「吾々はかうやつて笑ひもしますけれども、腹の中は煮えくりかへつて居る、實際残念でたまらぬ、殊に海軍の將官として自分は残念で堪らぬ」と。此時此際、日本人として一番聴きたい聲ではなからうか、本誌は八月號を特別編輯にしまして、此の貴重の聲全文を掲載する事にしましたが、更に單行本として發行します、盛に御申込下さい。

定價 一部金拾貳錢 特價 施本用拾貳部 名古屋市東區田代町城山 編輯 局  
送料金貳錢 金壹圓(送料共)

電 東五四八七番  
振替名古屋一〇八一九番

# 日蓮主義より見たる無量義經

(第十六回)

井村日威

善男子、我起樹王、詣波羅奈鹿野苑中、爲阿若物隣等五人、轉四諦法輪時、亦說諸法本來空寂代謝不任念々生滅。

(二〇、五、一一二〇、八)

此文は如來の最初の說法たる阿含の時を指したのである、佛成道の初に於て三七日の間衆生の根を鑑み給ふたが、直に佛の證悟を其儘説くことは出来ない、衆生と佛とは餘りに考えが異ひ過ぎる、到底佛の説教を受入れる事は出来ない、受入れることが出来ない計りてなく却つて教法を謗りて破法の罪業を起すであらうと思はれた、此の時を華嚴の時

と云ひ擬宜の說法と言ふて居るが、最初の華嚴の時なるものは、我々人間の間に説かれた御說法ではなくて、佛の海印三昧、即ち思想の中に顯れた御感想が御經文と爲つて残つて居る、此が凡夫二乗と俱ならずと云ふて居る處である、事實の如來の說法は阿若物隣等の五比丘を對告衆として阿含小乗の教を説かれたのが最初で、其時の事を此處では初説と云ふのである、阿含の說法は諸法は空寂にして有爲消滅の法なりと説いて、現象の諸法には實在性のなき事を力説して、此諸法に執著すべからざる旨を明し、此執着の心無きものが涅槃を證つたものと云ふことに爲つて、身體も智慧も一切を空無に歸することが

究竟の目的であつた、其事を本節に説いたのである。

中間、於此及以處處爲諸比丘並衆菩薩、辯演宣說十二因緣六波羅密、亦說諸法本來空寂代謝不任念々生滅。

此は方等般若の二時の說法である、主として權大乘の諸教であつて、小乗の諸經に比する一段進んだ教理をお説に成つたのであるが、諸法の現象に就いては本來空寂代謝不住で、無常生滅の現象界であること説いた事は小乗の諸經と異なつては居ないが、其根本の本体を説明するときは小乗の夫よりも深い意味で説いた、法相宗の唯識論でも三論宗の八不中道論でも、其諸法の本体を説く場合には小乗のそれよりもより深い處がある、小乗では其本体の説明は寧ろ缺いて居ると云ふてもよい位で、現實の方面を論じて居る、其現實の方面で言ふならば、其説明

に些少の異目はあつても、無常遷滅の現象界であることを否定することは出来ない、其本體を論ずる時に大小乗の差別が出来る譯である。

今復於此演說大乘無量義經、亦說諸法本來空寂代謝不任念々生滅。

今經無量義經に於ても同様の意味で諸法の空寂生滅の義を説いて居る、若も言葉丈で言ふならば、佛の説教は何時も同じ事を説かれたと言ふことに爲るのであるが、其深義ある處を能く究めると、大に異目のあることが出て来る、故に次の文に

善男子、是故初說中說後說文辭是一而義別異、義異故衆生解異、解異故得法得果得道亦異。

と説く、文辭即ち言葉は同一であつても其意義を異にする、前に月の例を擧げてお嘲を致したが、月



は圓いと云ふても、小供と大人とでは圓い意味が違ふ様に同じ空寂と云ふ言葉で言ひ顯はしても、諸法の全體を空寂と見るのと、其は表面の現象界は空寂であるが、其實體全部は空でないと見るのとでは、其意義は大變に違ふて來る譯である、觀察する教法は幾通りもあるが、觀察せらるゝ諸法は一つしか無い、一の諸法を教法を通して見る場合に見方が違ふて來るのである、見らるゝ諸法が一つである以上は、そんなに隔離された見方のあるべき筈は無い道理である、更に一例を擧げて言ふならば、幾種もある望遠鏡で天體を見る様なものである、望遠鏡には精粗の別があつて充分見へるのを見へぬのとはあるけれども、見らるゝ天體は何時も異はない、異はないが望遠鏡が悪ければ充分に天體が見へない、大きな星は見へるが遠い小さな星は見えない、見えないから

無い様に思ふ、上等の望遠鏡で見れば遠方の小さな星まで見える、そこで一つの天體であるが、見る方の鏡の如何に依つて天體が違ふて見える、然し全體が違ふのでは無くて、大きいのが見えるのと、更により以上に精細に見えるのとの違ひがある丈で、三つ星はいくら上等の鏡で見ても四つには見へない、北斗七星は肉眼でも上等の望遠鏡でも七つしか無い、其他の見えない處が見えるのが違ふのである、今の法門も其通りで、小乗でも權大乘でも實大乘でも、現實の世界を見る時は無常遷滅の世界であることは違はない、小乗は無常遷滅と見るが、實大乘は常住不滅と見ると云ふ様な事にはならぬ、現實の有様は一樣に見えるが、其奥深き處に實在の意義ありと見るか、見ないかゞ遠目になるのである、小乗の教では其表面ばかりを見て、其根本を見ることが出来ない、

粗末な望遠鏡で天體を見る様なものだ、肉眼でも見える様な事丈しか言はない、誰が見ても此世間は無常であり苦の世界であり不自由の世界であることは明瞭である、其苦の娑婆、無常の世界に執着して常住のを見を懐き、樂しき考を起すから、迷見であると言はれ煩悩なりと言はるゝのである、無常の世界を無常と見ることが出来れば證悟と言はれて居るが、夫れは小乗で言ふ證悟である。今些し精細な望遠鏡たる大乘殊に實大乘の一番上等の鏡で見ると、今迄無常遷滅の諸法と見えて居つた、其奥に常住不滅の本體がある、此本體は我々の様な凡眼や、小乗教の様や安望遠鏡では見えないが、實大乘の鏡なら見える、諸法實相と云ふ言葉で言顯して、其常住不滅の實體ありと説明した、此無量義經に曇に一相、無相、實相と云ふ言葉で説いてあつた、此が諸法の本體で

ある。此本體を見た上で、諸法の遷滅無常を見ると其は表皮であつたと云ふことが分る、此諸法實相を知るのは唯佛與佛乃能究盡と云ふて佛陀の證悟の智眼でなければ見ることが出来ることも出来ない、我々は佛の教たる實大乘の望遠鏡を通して、漸く其大體の輪廓位を知ることが出来るのである、左様な譯で佛は諸法の相狀を説き給ふに同一の言葉で説いたけれども、其意義に淺深ありしたために、聞く方は又其智識の程度に依つて了解が異つて來た、故に得法得果得道亦異なりと説いたのである、次の經文は、其得益の異つた相狀を説いたのである。

善男子、初説四諦爲求聲聞人、而八億諸天衆下聽法、發善菩提心、  
初説阿含の時に小乗の教に依つて、而も大乘菩薩の心を起したもののあるを説いた。

中於處處演說甚深十二因緣爲求辟支佛一人而無量衆生發菩提心或住聲聞次說方等十二部經摩訶般若華嚴海空宣說菩薩歷劫修行而百千比丘萬億人天無量衆生得住須陀洹得斯陀含得阿那含得阿羅漢果住辟支佛因緣法中

夫れより彼方等般若華嚴(後分の華嚴を云ふ)等に菩薩の歴劫修行の法を主として説きし時も聲聞や緣覺の證を得たものを生じたが、相似の言辭あるが故に各自の智識程度に依つて其證悟の程度が異つて來たのである、其所以は、

善男子、以是義故、故知說同而義別異、義異故衆生解異、解異故得法得果得道亦異、

で、言辭は同じでも、其義即ち意味が異ふに依つて聞く人々が異ふた了解を得るに至つたのである。

是故善男子、我得道初起說法、至于今日演說大乘無量義經、未曾不說苦空無常無我非眞非假非大非小本來不生今亦不滅一相無相法相法性不來不去、而諸衆生四相所遷、

右の文は前來の文辭雖一面義各異の一段を結成したので、斯様に如來は初より今此經を説くに至るまで、無常遷滅の諸法なりと説いて來て居るが、其本性に不生不滅不來不去の實相の妙牀の存在することを認める様に進まねば、如來の説法の眞實義を得て居るものではない、其根本義を捉へることが、佛教信仰者の大切な點である。

顯本法華宗管長大僧正本多日生現下序 (既刊)  
 統合宗學林高等部學長僧正井村日成著

# 日蓮聖人の宗旨

廣本

正價 布裝金參圓也  
 紙裝金貳圓也  
 郵稅書留小包金拾八錢也

卷頭寫真版 一、日蓮聖人御眞像大淺茶室 壹葉  
 第一章總說 一、御眞像觀心本尊の第一節 壹葉  
 第二章教義 一、教觀の大綱 二、佛陀教化の元意 三、佛教の本體の依據 第四章教法 一、方便の施設 二、久遠の顯本 三、三界的流轉 四、救法の總要 第五章僧伽 一、僧伽の意義 二、佛陀の顯本 三、佛陀の體相 四、佛陀の教主 五、三徳の教主 六、佛陀の體相 七、佛陀の妙旨 第八章教心 一、發心の動機 三、法華の導師 第六章本門の題目 一、一音の妙旨 第七章人身 一、三千 二、佛子の自覺 第八章教心 一、發心の動機 三、法華の導師 第九章修行 一、修行の要旨 二、信仰の三義 三、三力合成 四、正助の二行 五、宗教の五綱 第十章得法 一、意觀の利益 二、内外の二蓋 三、得法の種類 四、相對 五、攝持の二門 六、六根の攝持 九、種々の總行 十、處世の志願 第十一章本門の戒壇 一、教觀の一致 二、戒律の意義 三、事戒と理戒 四、本門の利益 五、絶待の利益 六、所期の國土 七、攝持の二門 八、六根の攝持 九、種々の總行 十、處世の志願 第十一章本門の戒壇 一、教觀の一致 二、戒律の意義 三、事戒と理戒 四、本門の利益 五、絶待の利益 六、所期の國土 七、攝持の二門 八、六根の攝持 九、種々の總行 十、處世の志願 第十二章總結 一、三秘の要領 二、學解 三、實行の要領 三、秘傳の要領

坊間日蓮主義に關する著書多しと雖も、之を組織的に記述し要領を得せしめたるもの甚だ尠し、著者多年統合宗學林高等部學長として學生の畫陶に従事したる經驗に依りて、日蓮聖人教義の全斑に亘りて組織的に記述し、且つ平易簡明に何人にも了解し易からしめんが爲に本書を著せり、日蓮聖人の教義を研鑽し其信仰に生きたるの人士は是非一本を其座右に供へ熟讀せらるべし、必ず得る處あらんと信す、本書は口語文體にして總つり假名付なれば何人にも讀過し易く男女貴賤を擇ばず、必讀の要書なり、敢て大方の諸士に閱讀を勸奨す。

發行所

東京市淺草區北清島町

團

臨時電話小石川七六八番  
 振替口座東京一一一九番

罷睡録 (其三)

黃薇庵 青 村

五、奇抜な求妻廣告  
憲政會代議士中の利け物たる頼母木桂吉、此人が未だ政界に志を有たず、或會社に牙籌を執てコツ

分の娶る女房を他人に世話されるのも本意でないとい一流の意地を張り、さてこそ其當時には破天荒な新聞廣告、

「と營利の業に従事して居た時の事、素より青春蓬勃の意氣盛んに紅燈綠酒の巷に高陽侶と會して随分と不良振を發揮して居たが、流石に酒前酒後一味の寂寞を感ずること屢々であつた。「俺にも女房が欲しくなつたと見えるわい」頼母木サンは思ひ當つた、でも自

「妻を求む、美なれば猶ほよし、美ならざるもよし、學あるもよし、學なきもよし、懸直なしの淑女を求む」  
と云つた文句が報知新聞の廣告欄に現はれると、多くの人々は唯々目をそばだてた而已であつた間に音楽學校出身の一婦人は男々しく

も、頼母木サンに會見を求め第三者なしの對談數刻、ついに終世の約を結んだ。是なん今の駒子夫人その人である。  
斯う來ると男の意地も面白味とよりも寧ろ痛快味がある。自由結婚の是非は別問題として。

六、三筆と三門  
涼筆は浪華に住みし僧なり、其性頗る酒脱にして詩作も亦拙ならず、一代の詩人廣瀬淡窓と交遊最も密なりき。  
涼筆一の瓢を愛蔵せり、淡窓其所望せしも「アリアヤ與られぬ俺が生命の泉だから」と云ふて、中

々手離しさうもなし、さて爾う惜まるれば惜まるゝほど感しきは人情の常、淡窓一日その瓢を手に取り上げ無断に持ち歸らんとす、涼筆あはたゞしく其瓢を奪ひ返し之を筆筒の中に收め

云ふ美人が此邊に住んで居た、頗る評判が高い、然るに其おもんの住んで居る長屋と云ふのが、右門と云ふ神主の門前に在たので、三つ重ねて門を詠んだ、其頓才其類智なかく、以て尋常人には眞似が出来ぬと云ふので、終に涼筆も我を折り此上は是非なしと被愛瓢を淡窓に贈つた。

ンにあらす唐變木でもなし、何となく人なづつこい處がある。今人此妙味を知らず、呪ふべきは俗惡文明なる哉。

「涼筆筆筒收瓢筆」  
と微陰しながら「ごうちや名吟だらう、君もしあの瓢が欲しいと云ふなら此座で即刻此對句を詠給へ」  
「よし詠んだらあの瓢は俺のものだな」「勿論ナ」と云はれて、淡窓即座に

古人は概して無慾淡泊、其天分に安んじて雍々迫らず、道に活き藝に遊び友と交り世を益す、明日の米代の有無なぞ問題とせぬ處に難有味あり、其くせ市井の些事にまで通曉せり、決してアンケラカ

「右門門外見阿門」

と云ふ句を詠す、言ふ心は阿門と

廣告

暑中御見舞申上候  
統一團神戸支部  
立正結社神戸分會  
熊井本光  
乍略儀誌上を以て御あいさつ申上候

# 我等いかに進むべきか (下)

森 川 日 修

今少しく考察を進めて見たいと思ふ、併し我等の智的考察が完全の域に到達し得るや否や疑がはしい。

釋尊は法華經に「如來は如實に三界の相を知見す、生死の若は退若は出有ること無く、亦た在世及び滅度の者無し。實に非ず虚に非ず、如に非ず異に非ず三界の三界を見るが如くならず、斯の如きの事、如來明かに見て錯謬有ること無し」と説かれ又、「佛の成就し玉へる所は第一稀有難解の法なり、唯だ佛と佛と乃し能く諸法の實相を究盡し玉へり」とも説かれてをる。

從來是等の意を至極平凡に至極輕易に至極無難作に説明せらるゝを聞いた、説者は必ず其意義に透徹

せらるゝであらうか、我等は未だ以て充分に其意義を諒解し難い邊がある。

或人は如來は我等が認識する如く認識せず、又た佛と佛とのみ能く知ると云へば、既に人類の智的問題外である。我等は佛でない平凡な人である、從て感覺經驗智識を以て總てを判斷しつゝある、然るに超感覺的な超經驗的な超智識的なものなら、一の空想であるとも云へる、又た決定的不可解のものともいへる。既に空想であり不可解のものごせば説明はいかやうにもできるもので此れ程不確定のものはないと云ふてをる。

此の言も一應理がある、我等は何事も感覺經驗智なく、乙者の見るところ定めて丙者の如實知見でなく、故に山紫水明是れ如來と直観するものもあれば、雨滴風露是れ真理なりと観する者もあらう、如來の如實知見を一の遊戲として弄ぶには趣味もあらうが眞諦に人生を味ふ者には餘りに空漠たるを免かれぬ。

歐洲に於ても神を知らんとして禪的の説明を試みた時がある。

靈魂の作用 中最高尚なるものを認識作用とす、之に三種の別あり、感覺的、理性的、超理的なり、第三の作用によりて事物の眞理を洞察す、凡て認識とは能知的、主観即我が所知的客観即ち對象と合同することなり、今神の認識に於ても亦然り、之によりて神と合するを得、福祿を招くを得べし、此の如き認識はた超理的直観によるの物なし。

(マイステル エツクハルト)

エツクハルトは十四世紀の始め教會學師派の代表

識によつて總てを批判し決定するは事實である、既に感覺經驗智識を超越したものとせば、此は我等の判斷外のものであるから、何人も隨意に論議し得る、從て其論議の正否を決定するものは何人もないことになる、なせなれば此は人類智識外のものであつて人類の智識を以ては正否を決定し難いものであるからである。

普通の智的考察を以て諒解し難しとせば、何を以て知るかの問題となつてくる、茲に於て情意を以て直観せんとする、此方面に極力努力したものが禪宗である、ところがこの禪の努力が果して如實知見に到達し得るや否や是又た疑問である。何んとなれば各人の情意は同一のものご見ることができない、必ず各人の情意は別箇のものご思はれる、從て如來の如實知見を甲者の見るところ必ずしも乙者のそれで

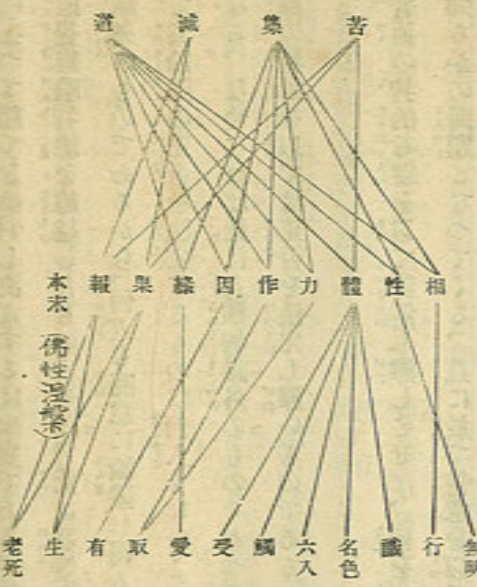
的人物であるが、彼は感覺的、理性的を超越したる直観によつてのみ神を知り、また事物の真相を洞察することができると云ふ邊は餘程禪の直観に類似してをると思ふ。

佛典を通じて人生宇宙を説かれしを見るに、四諦

(四諦)

(十如)

(十二因縁)



十二因縁、實相の説き明かし方によりて種々の論議が展開してをるやうに思はれる、此の四諦、十二因縁、實相を教學的に各別に論述するは此稿の目的でなく、寧ろ此等を一括し一貫して考察して見たいのである、此等を一括して如實知見に到達せんと試みたのが天台である、今天台の試み方を表示して見やう。

四諦と云ひ、十二因縁と云ひ、十如實相と云ふも結局本體(佛界)現象界(衆生)の説明である。そして我等の現象界がいかにかに顯れしかを天台は順流十心を以て生起を述べ、逆流十心を以て涅槃に到達すべきを述べてをる。

順流十心とは、一には無始より墮落昏迷して煩惱に墮されたり人に我を對す、人我を對する故に身見を起す、身見の故に妄想顛倒あり、顛倒の故に貪瞋癡を起す、癡の故に廣く諸業を造る、此の空慧心と相應してそこに寂靜涅槃を知ることができると云ふてをる。

この逆流十心を生ずる第一要件は止觀である、そこで天台は止觀の意義をかう説明してをる。

體達すること既に成れば妄想を得ず、亦た法性を得ず、源に還り本に反す、法界俱に寂なり、是を名けて止となす、此のこと止の時上來一切流動皆止む。  
觀とは無明の心を觀察するに、上法性に等しく本來皆空なり、下一切妄想善惡等しく皆虚空の如く二無く對無し。(天台)

止觀を體達するには必ず相當の修行を要する、其は四種三昧の修行である。此の修行は常座、常行、半行半座、非行非座と稱し超世間的實行をせねばならぬ、常座は九十日間結跏正座し口に一佛の御名を稱し、心は寂滅法界に專念し慚愧懺悔するの外は

を造る業に則ち生死を流轉す。二には内に煩惱を具し外惡友に値ひ、邪法を扇動し我心を動惑し倍加憂盛なり。三には内外惡緣既に具して能く内善心を滅し外善事を滅す。又た他善に於て初て隨喜なし。四には三業を變態にし惡として爲さざるなし。五には事廣からず善も惡心獨り布く。六には惡心相續して晝夜斷ぜず。七には過失を覆護し人の知るを欲せず。八には曾惡底究にして惡道を畏れず。九には無慚無愧。十には因果を擲無して一間提と作る。(天台)

かくして生死流轉己むことなく現象界は相續する故に逆流十心を以て其根本をつかねばならぬ。第一に深く因果を信じ、逆流して遂に身見は我ありと認むるからこの見を起し流轉の素を作る、然るに元來我なるもの深く觀察するに無住處である、十方に我を求むるに不可得である、我心も自體空である、既に身心空なりと體達せば罪福の主體たるものがない、罪福の主體なしと知れば犯すべき罪もなく求むべき

經を讀み亦は咒を唱ふるも心散亂の恐れある故につゝしまねばならぬ、常行は同じく九十日間阿彌陀佛の名を唱へ亦た心にも専ら彌陀を念じ、善師を求むる爲めに乞食せねばならぬ、半行半座は七日間齋戒沐浴して身心を淨め、月の八日より十五日に至る迄百二十通して十方の佛を禮し口に陀羅尼咒を唱へ、心に實相を觀じなければならぬ。非行非座は行座に拘らず彌陀觀音勢至を念じ、特に觀音を念するのである、此れが第一期であつて二期三期等と永續せねばならぬ。

かく超世間的の修行を要するから、勿論社會的の業務に従事することは許さぬ、從て天台に三種三昧を修する者は以下の四條件を守らねばならぬと云ふてをる。第一は生活の爲めに身心を勞することはいけない、第二は人事に關係し世の出來事に心を用ゆ

ることはいけない、第三に種々の技能を研究することもいけない、第四に學問の研究も心を散亂するからいけないと拒否してをる。

天台は支那佛教隆盛の陳隋の人であつて帝より智者大師と號せられし位であるから、學は古今を統べ亦た徳高く、從來佛學者の判釋説を綜合して佛一代の教義を組織的に説明し、其の深奥を闡明したる大佛教者なりしことは何人も推賞するところである。去れど彼の着眼したる教者信條が社會人心を指導する宗教としては未だ人心の樞機に觸れてをらぬところがあつた、故に天台の學は益々研究せられつゝ宗教としては支那に於ても生命が餘り永くなかつた。これは組織的に佛教の深理を説かれてあるとしても彼の佛教修行が超世間者及貴族的な山林的なものであつて、我る特種の人は行ひ得んも、到底普通人に

適するものでない。故に支那に於ても其後普通人に適する淨土教が行なはれ、又は複雑な教義を棄て、直截闡明な禪が流行せしことは理由のある事である。

本邦に於ても比叡山は佛教學者の學園であつたが法然親鸞の徒山を下り平民的の易行を唱道せし點は注目すべきことである、法然親鸞の徒天台を棄て易行の稱名念佛を教へし邊は、よし其教義に誤謬ありとするも被等凡愚に對する着眼なるものでない。

宗教は其の説く處行ふ處至極簡單にして而かも其中に完全無上の眞理を含有せしものでなければ、人を教化することもできなければ、又た生命も永久のものでない、法然親鸞こゝに着眼し易行の舉證を経典論師に求め、彌陀專唱を勧め、生活に奔走しながら人事に執掌しながら、技能を研きながら、學問をしながら、只だ南無阿彌陀佛たるべしと勤め、批判

力なき凡愚を牽入れたる手腕は智者學匠も及ばぬところがあつた、然れども彼等が彌陀にひつかゝりたるは支那淨土教に累せられたるので、彼等が本地久成の如來の中心を逸せしことは一大失敗であつた。

傳教が天台宗を比叡山に貴族的な學究的な隱秘的な佛教を傳流せるを見て、貴族的に平民的を加味し神秘を以て人心を指導せんと試みた弘法は確かに智者である、彼は中心に佛身に於ける三身各論の法身を大日と眺め、其の法身の應現として諸佛諸菩薩諸天怪身を統一し曼陀羅壇上に數千の怪化身を表示し、祈禱式の場合に怪化身を特設し、人の膽を奪ひ人目を眩せしめしは彼れ特得の妙技である、併し彼れ弘法と雖も一の幻術者を以て快としたものでない、彼は本地垂迹説に於て諸神を統一せんとせし努力は多大の者である、然しながら三密相應の秘法も

研究の進むにつれ彼の信せし如き効果は永續すべくもない、漸次我利／＼盲者の信仰対象として餘命存續せんも、宗教としては亡ぶる運命になつてをる。

天台の學説の深奥なるは勿論、弘法着眼にせよ法然親鸞の他力本願にせよ、又は禪の直觀にせよ、各々看るところによつて多大の努力をしてをること容易なるものでない、されどおしいかな皆悉く中心を逸して眞に釋尊の眞意に徹底してをらぬ、中心を逸する故に凡ての努力が悉く徒勞になり、或は害をなすに至る、是れを憂ひられたる聖日蓮は折伏の法輪を轟へし嚴正なる批判を佛者に與へ我等に中心を示されたる慈悲は崇高至大のものである。

諸宗は本尊にまごへり、俱會成實律宗は三十四心願結成道の釋尊を本尊とせり、天尊の太子速達して、我身は氏の千とおもふがごとし、華嚴宗眞言宗三論宗法相宗等の四宗

できる、相對界の我等が絶待界の境智を如實知見するは至難のことである、若し我等が絶對界を知ることができるといはば、それは絶對界を相對界に對したもので、つまり絶待でなくて相對であると思ふ。絶對如來の智見は只だ信仰によつて渴仰するより外ないのであらう、我等の目は萬物を見得る、されど目が目を見ることはできない、妙來の一切智は差別智を絶した、一切智が一切智を照す如實知見でありはしまいか、此の境智が智識第一の舍利弗も到達しがたく只だ信仰によつて求めたやうである。されば我等は教法によりて如來を信するより外に方法がないことになる、かくなるこそ是非とも如來をものゝ見方を確立せねばならぬ。諸宗の如來を見るや、淨土教は恰も或る美術家が富士山を書き種々の彩色を施し、西方の眉間に掲

は大衆の宗なり、法相三論は體應身に在る佛を本尊とす、天王の太子我父は、侍とおもふがごとし、華嚴宗眞言宗は釋尊を下して盧舍那大日等を本尊とす、天子たる父を下して種姓もなき者法王のごとくなるにつけり、淨土宗は釋迦の分身の阿彌陀佛を有縁の佛とおもひて教主をすてたり、禪宗は下賤の者一分の徳あつて父母をさぐるがごとし、佛をさげ經をくだす、此皆本尊に迷へり、例せば三皇以前は父をしらす人皆食數に同ぜしがごとし、毒量品をしらす諸宗の者皆に同じ、不知恩の者なり、故に妙樂云く一代教の中に未だかつて違を駭けさす、父母の毒知らざる可からず、若し父の毒の遺きを知らざれば復交統の邦に迷はん、徒らに才能と謂ふともまたりとの子にあらす等云々、妙樂大師は唐の末天寶年中の者なり、三論華嚴法相眞言等の諸宗並に依縁を深く見廣く駭へて、毒量品の佛をしらする者は交統の邦に迷へる才能ある畜生とかけけるなり。(日蓮)

本體を絶對とせば現象界は差別相である、差別相は我等の智識經驗感覺を以て分に從つて知ることがげ諸人をして賞賛せしむるやうなものであるまいか此書を見る人は情に於て満足するとするも其人が眞の富士山に登ることはできないと同様である、眞言の法身觀は富士山の樹木土石を八方に散じ、此の樹木土石が富士山なりと稱するを一般にして、この樹木土石は富士山の者なりとするも土石が富士山と稱することはできない、禪宗は湖面に映せし富士山を見て眞の富士山とし眼中富士あり富士山大なるか眼球大なるかと問答してをるやうに思はれる。聖日蓮は是等の力なき寫象の富士山を基本とせず眞善妙色具足の富士の絶頂に人をして登らしめんと努められたものと思ふ。法華經の深達罪福相遍照於十方(報身)微妙淨法身(法身)具相三十三(應身)の文を天台は三身に分かつて説明してをるが、深達罪福相遍照於十方だ

けの如來では完全の如來でない、微妙淨法身だけの如來でも完全の如來でない、具相三十二だけの如來でも完全の如來でない。此文を一貫し一括してこそ眞の如來である、各宗の教祖等悉く己れの欲するまゝに三身を各別に見つめてをる、故に聖日蓮は此を憂ひ給ふて三身即一の應身を見つめよと絶叫し給ふたところは實に不磨の金言である。

三身即一の應身如來を主眼として渴仰する處から人生觀宇宙觀が各教祖の見方と全然異なつてくる、被れが靜的であれば此れは動的である、彼が死の佛教なれば此れは生の佛教である、彼れは本體に遷源せんとし、此れは現實に本體を顯現せんと努力する、被れは過去を顧み此れは將來を見つめる、我等幸ひ聖日蓮の流を汲むもの此の如來觀の上から人生の行路を誤つてはならぬと思ふ。

## 記 事

### 東京統一關の時局大講演會

内外重大なる時局は日蓮教徒の憤起なかるべからず、統一關の中央宣傳會堂統一關に於て、先づ炬火は擧げられた。當代の名士を招いて、統一關と立正結社と大日本日蓮主義青年團との連合主催の時局講演會は、連日して毎日曜に開催された。其の第一回は六月八日午後三時から、講師は海軍中將佐藤藤太郎氏文學博士青木次郎氏、陸軍中將佐藤藤太郎氏であつた。佐藤藤太郎中將の講演は代表的に

本誌巻頭に掲載することにした。又第二回は六月十五日午後二時半から開かれた、講師は海軍大佐中村虎之助氏、海軍中將山路一善氏、國柱會總裁田中智學氏、衆議員議員植原悦二郎氏であつた。第三回は統合學林學生團によつて、若い人達の叫びが開かれた。毎回二千餘人を收容しうる大會館は滿員の盛況であつたのによりて此運動の成來を知る事が出来る。

### 北海道開教の曙光

監督布教師 笹川 日堂

予は東北北海道佐渡越後等の各地方を巡教した、特に北海道札幌市白石町に新設された顯本寺を親しく視察を遂げたが、此の顯本寺を根據として、將來本宗團が開教活動に貢献

することに想倒して、實に欣快に堪へない。顯本寺創立の基因は同寺創立の發願者たる本澤隆正尼が明治四十四年三十四歳の時その夫君を喪ひ、菩提を弔ふために佛門に入り、

四四  
大慈衆生を憫み、故に我をなして歸依せしむ、善く衆の善言を授く、故に大醫王と稱す、世醫の療治する所は、差ゆと雖も選つて復生す、如來の治したまふ所は、畢竟して復發らず、世尊甘露の藥、以て諸の衆生に施す、衆生既に願し已らば、死せず亦た生せず。(迦葉)

終



親族知己の壓迫的諫止を斥けて今の處に教會所を設立して、教化に従事した、宿縁の齎發する處あり、大正十年十二月致意として上京し本宗に歸正せられ、茲に顯本寺創立の志願を成辦し、夫君の名を探り「賴成山顯本寺」と管長親下より命名されたのである。

顯本寺境内は千五百坪にして所有資産として畑地二丁八反歩ある、此の二丁八反歩は將來末鏡市 中心地となり、凡へて宅地として善用せらるゝの時が来る。

顯本寺現存の建物は五間に八間の木造平屋である、是れは本堂新築と俱に庫裡に使用せらるることになる、本堂は間口七間奥行六間半にして、既に基礎工事は竣成して七月十三日を卜して、上棟式を擧ぐるの運びである。

本澤隆正尼は人格の人である、その信念の強き操行の高潔なる實に敬服に堪へない、その信念と其の高潔は夙に官廳の認むる處にして、大正十二年四月二十日付を以て、北海道長官宮尾善治氏より保導委員(内地に於ける方面委員)を囑托せられ、専ら社會救濟事業に奔走し、尙教化活動には犠牲的一身を捧ぐる旨を誓願し、着々實踐執行して居る、實に男僧をして顔色なからしむる程がある、予は



實感の餘り此に紹介する事にした。

### 神戸自慶會報

五月十三日午後零時中より、三菱内燃機「精神生活と佛敎」本多大僧正△同日午後七時より、縣立工業學校夜學部生徒一同「時弊の匡敎」本多大僧正△同日午後二時より、縣立工業學校生徒一同「讀書を拜して」本多大僧正△同日十六日午前十一時より、岡山縣宇野三井造船所「三つの心得」本多大僧正△同日午後三時より、同所「讀書を拜して」本多大僧正

六月十七日午後零時中より、三菱内燃機「國難に處する覺悟」本多大僧正△同日十八日午後一時より、縣立商業學校生徒一同「國民の覺悟如何」本多大僧正

### 名古屋自慶會報

五月二十二日豐田式織機に於て、聽衆一千名、大西郷の遺訓△同日豐田洋切、聽衆二百一人とは何ぞや△廿三日山岸製材、聽衆三百五十、大西郷の遺訓△同日選定合名會社聽衆二百、讀書を拜して△廿四日豐田水

五月二十二日豐田式織機に於て、聽衆一千名、大西郷の遺訓△同日豐田洋切、聽衆二百一人とは何ぞや△廿三日山岸製材、聽衆三百五十、大西郷の遺訓△同日選定合名會社聽衆二百、讀書を拜して△廿四日豐田水

例月の妙教婦人會、議會等に愈々健實に發達しつつある。  
**神戸教報** 五月十四日午後七時半より、港東俱樂部にて「修行の心得と其實例」本多大僧正親下△六月七日午後七時半より、港西俱樂部にて「國歩艱難にして、偉聖日蓮を憶ふ」國友監督布敎師「現在の世相と思想問題」京藤布敎師△六月十七日午後七時半より、共益俱樂部にて「一團支部と神戸取引所組合と聯合主催、聽衆約一千名」精神作興に就て「神戸高等商船學校長小關三千先生」國難と國民の覺悟」大僧正本多日生親下。

有志にてかれてより組織せられたる同會にては、今回特別講座として毎週土曜日夜兼井本光師を聘し、日蓮聖人の教義の連續講話を聴かんと、六月十四日より開始せられたり。

**京都布教通信** 五月一日午後二時、本山國壽會修行「正しき信仰」藤啓純師△同日八日午後一時、成就院婦人會例會「建國之精神」有田安道師△同日九日午後二時、正行院婦人會例會「天晴地朗」萩原日道師△同日十一日午前十時、顯本健兒會例會△同日十二日午後二時、

社聽衆社員男工二百「南州翁の遺訓」△同日日本車輛、聽衆八百「大西郷の遺訓」。以上本多日生親下の講演があつた。  
五月十九日豐田機織工場に於て、「國民憤起の秋」六月十六日同所に於て、「時局に當面して日蓮を憶ふ」五月廿日同日置工場に於て、「國民憤起の秋」。以上國友文學士の講演があつた。  
六月廿三日東洋紡績に於て、男工 百名、「生活觀念に就いて」△同日三菱内燃機に於

## 各地教報

### 名古屋教報

四月に本多親下を講師に開始した行學會は一回と聽講者の熱心と數とを測へた、五月も六月も廿三日夜兼井常盤寺書院で開かれ、五月は「佛敎の大意に就いて」、六月は「阿含の大意」の講演があつた。  
統一團主催の日蓮主義講演會は五月に聽衆が廊下迄ビツキヲ詰まつたが、六月は入りきれなかつた者が數百人を越えた。五月は廿二日夜「全宗敎心の満足」、六月は廿五日夜「日蓮敎徒の決心」に就いて本多親下の講演があつた。

國光婦人會總會開催「婦人との佛敎」本多日生親下「統一節」窪田末吉君。△同日十二日午後七時半、統一團例會「綜合的佛敎觀」本多日生親下。△同日十三日午後二時、宗道會修行「所謂御利益とは」土持真進師△同日十六日午後二時、法光院婦人會例會「立正安國」豐田通泰師△同日十九日午後二時、大慈院婦人會例會「婦人内助と日蓮主義」土持真進師△同日十八日午前十時、顯本健兒會例會△同日二十五日午前十時、顯本健兒會例會△同日廿八日午後二時、開山會修行「形勝二法に就て」萩原日道師△六月一日午前十時、顯本健兒會例會△同日一日午後二時、本山國壽會修行「如來の慈悲」藤啓純師△同日二日午後二時於久遠寺、監督布敎師巡教「開會之辭」有田安道師「如來の第一義」京藤布敎師、國歩艱難にして、偉聖日蓮を憶ふ△國友監督布敎師、開會之辭「土持真進師。△同日三日午後二時、於寂光寺同巡教「開會之辭」藤啓純師、正しき道へ」京藤布敎師、信仰の力」國友監督布敎師、開會之辭「三好信道師

て、聽衆千四百、國家の現状に就へて」△同日山岸製材、聽衆三百、「國民の決心」△同日豐田製下、聽衆 百五十、「生活觀念に就いて」△廿五日豐田洋切、聽衆二百、「生活觀念に就いて」△同日豐田機織、聽衆八百、「時局に當面する覺悟」△同日廿六日豐田本社、社員及男工二百、「時局に處する覺悟」△同日日本車輛、聽衆八百、「時局に處する覺悟」△同日選定合名會社、聽衆二百、「時局に處する覺悟」實行總目。以上本多日生親下の講演があつた。

△同日三日午後八時、於本正寺同巡教「開會之辭」金光孝碩師、如來眞實の愛」京藤布敎師「國歩艱難にして、偉聖日蓮を憶ふ」國友監督布敎師「開會之辭」金光孝碩師△同日八日午前十時、顯本健兒會例會△同日八日午後二時、成就院婦人會例會「廿四孝と婦人の修養」有田安道師△同日九日午後二時、正行院婦人會例會「如來の本懐」萩原日道師△同日十二日午後七時半於久遠寺統一團例會「感激の精神」有田安道師△同日十三日午後二時、本山宗道會修行「苦の根源」有田安道師△十五日午前十時、顯本健兒會例會△同日十六日午前十時於寂光寺永昌樓の法要修行「儒敎と佛敎」三好信道師△同日十六日午後二時、法光院婦人會例會「婦人の修養」豐田通泰師△同日十八日午後七時半、聽語會例會「日本國民の文化的任務」藤啓純師「内憂外患」豐田通泰師、人の愚しきは我が愚しきなり」土持真進師、現代」有田安道師。「來國民の反省を促す」萩原日道師。同日十九日午後七時半、統一團例會「開會之辭」金光孝碩師、所感」杉村少將閣下、國家の現状と日蓮敎徒」本多日生親下「開會之辭」有田安道師。  
**京都布教通信** 五月八日日本正寺二樂會例

會「精神修養と法華經」三好信進師。「信は法藏の第一寶」金光孝碩師△同十日日本正寺婦人會例會「精選に援兵を送るが如し」金光孝碩師△同十日夜布下宅例會「講習に就て」日蓮宗布教師井上權山師。「字衛第一の寶典」布教師金光孝碩師△六月十日日本正寺婦人會例會「信仰要義に就て」金光孝碩師。

**大坂堂閣寺教報** 五月二十二日立正結社談話會「佛敎と社會主義」石井得雄、種熱脱の三益、和井田寛再△六月五日、開會の辭京藤山主「信は法藏第一の寶」金光布教師。「國歩程難にして偉聖日蓮を憶ふ國友監督布教師△十二日、「種熱脱の三益」和井田寛再△二十二日立正結社談話會、何れも盛會にして多大の感動を興へられたり。

六月十六日大抵俱樂部にて「國難來と日蓮敎徒」本多大僧正親下。二時間に亘る大師子吼は時局を論じて國民に大覺醒を興へ、日蓮敎徒の一大奮起を促し、聽衆に多大の感動を興へ、近來になき盛大なる大講演であつた。

**久留米教報** 立正結社九州支部主催の下に本年二月講習會を催し、純正日蓮主義を中心にして教化運動を試みて以來、主義に感動せる眞摯なる信徒を得、大に宣傳に努力してゐる

最近に於ける會合次の如し。  
△三月廿一日川上氏宅「法悦の内容」平岡本信、「時代を導く敎」中原通應、△四月五日天晴會、基督教批判、中原法學士、△四月十二日日天晴會「日蓮主義の國家觀」中原法學士、「日蓮主義の時代思潮」中原通應、△四月廿二日地明會「人格修養の基本」中原通應、△四月廿三日國武玩具工場講話「開會の辭」國武虎太「幸福なる人」中原通應、△四月廿四日藤本宅△四月廿五日同氏宅、「法悦の内容」平岡本信、法華經に對する正しき觀察、中原通應、△四月廿八日、教團宗會、開會之辭「中原山主、清澄山、田籠金造「日蓮聖人の未來觀」大石師「統一節」綾川辰之助、△四月廿九日福立立正會辻淺次郎宅「法悦の内容」平岡本信、人格實在の大敎義、中原通應、△同日夜同氏宅に於て、近郷一般民衆の爲め公開講話會を催し多大の感動を興へた、立正大師の人格「統一節」綾川辰之助、△五月一日加來洋服店々員講話「共存の力」中原通應、△五月三日天晴會「日蓮主義より觀たる時代思潮」中原通應、△五月四日大月宅第一講、「清澄山」藤本、「立正大師の人格」中原通應

△第二講「觀の口法難」藤本、「國民協力」の秋、中原通應、△五月五日正信會「日蓮主義の信條」中原通應、「統一節」綾川、△五月七日第八師團司令部に於て主計團總會、將校全部に對し、午前九時より講話、開會宣言「上田一等主計、日蓮主義と人格の完成」中原通應。

**金澤布敎宣傳** 六月十三日午後八時立正會講演「法華經の色澤」本郷當次郎氏△六月十七日午後八時於坂井氏宅「東西兩洋文化の相違」本郷當次郎氏△六月十九日午後八時於三由氏宅「信仰坐談」篠、純榮師△六月廿二日午後三時於本長寺「本郷問題」窪田純榮師「方便講話」本郷當次郎氏△六月廿六日午後八時於本長寺、天晴會講演「乘草吟品講義」窪田純榮師「對米問題と吾人の覺悟」本郷當次郎氏△六月廿八日於本行寺「思想の惡化に就て」石井會草師「佛敎哲學の根本原理」本郷當次郎氏。

**千葉縣長生部報** 六月一日午後長生部登田村長尾本立寺、立正結社主催講演、「時勢革正」山田誠心師、「立正結社」高貫見龍師、「法華經女性觀」森田會正師、「身證實修」成嶋隆榮師、「佛敎統一節」手代木先生△同夜同村大登萬福寺立正結社主催講演、今の日本人の立脚「森田師、日蓮主義と我邦」山田師、「立正大師の日本傳統第一のの礎を仰ぐ」高貫正太師、「國民の自覺」成島師、「佛敎統一節」手代木先生

## 廣 告

### 日蓮宗法衣専門

諸種の準備が整ひましたから御注文品に就ては懇切町重に而も廉價で勉強いたし多年の御愛顧に酬るたう存じます。どうぞ御用命を願ひます

東京市赤坂區一ツ木町八十六番地

柏屋 中山喜太郎

(市電)豊川稻荷前

### 社寺建築用の安價提供

當所は社寺建築改善の目的を以臺灣總督府、内務文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申此間工事の大小に拘らず左記御便宜個所へ御相談後下度候  
追て設計規程並目安表等御入用の向は御申越次第  
早上仕候

社 寺 工 務 所  
東京市麴町區有樂町三丁目三番地  
(電話青山四六六三番)

社 寺 工 務 所大阪支店  
大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所福岡支店  
福岡市外堅箱町馬出松原  
(電話西三二二四番)

社 寺 工 務 所京都出張所  
京都市上京區廣道二條上ル  
(電話上六三六番呼出)

社 寺 工 務 所鎌倉出張所  
神奈川縣鎌倉由比ヶ濱町二百四十番地  
(電話百十七番)

社 寺 工 務 所鶴見支所  
神奈川縣鶴見町芦穂崎

社 寺 工 務 所鶴見支所

# 本多日生宛下施本用著書一覽

- 法華經自我偈講義 金 貳 拾 錢  
拾部 特價 金 壹 圓(送料共)
  - 法華經要文 並製 金 參 拾 錢  
上製 金 五 拾 錢
  - 教育勅語と思想問題 金 貳 拾 錢  
拾部 特價 金 壹 圓(送料共)
  - 國民精神の涵養 金 五 錢  
參拾部 特價 金 壹 圓(送料共)
  - 佛教の概要 金 五 錢  
參拾部 特價 金 壹 圓(送料共)
  - うゐの奥山今日こえて(近刊)金貳拾錢  
拾部 特價 金壹圓廿錢(送料共)  
以上各送料一部金貳錢
- 右講讀希望者は左記へ申込んで下さい
- 名古屋市東區田代町城山  
統 一 編 輯 局  
電話本局東五四八七番  
振替名古屋一〇八一七番

# 廣告料値上げ

發行部数は激増しました、關東震災の爲に印刷が名古屋に移つてから丁度二倍になりました。で、廣告料を値上げします。

一頁金拾五圓 半頁金九圓  
表紙一頁金貳拾圓 四分一頁金五圓(前納の事)

價定一統

一	冊	金 貳 拾 錢	送料五圓
半	冊	金 壹 圓 貳 拾 錢	送料共
一	冊	金 貳 圓 貳 拾 錢	送料共

大正十三年七月十七日印刷納本(第三百五十三號)  
大正十三年八月一日發行(第三百五十三號)

不許複製

編輯所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地  
發行所 名古屋市中區千種町字五反田五二番地  
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地  
編輯人 國友 日 斌  
印刷人 鈴木 日 雄

發行所 統 一 編 輯 局  
名古屋市中區田代町字城山七十七番地  
電話名古屋東五四八七番  
振替名古屋一〇八一七番

# 目 次

國家の現状と日蓮教徒……………	本 多 日 生
哲學上より見たる排日問題……………	井 上 哲 次 郎
日蓮主義より見たる無量義經……………	井 村 日 成
法華經要文講義……………	本 多 日 生
記事報導……………	

第廿八年九月號

